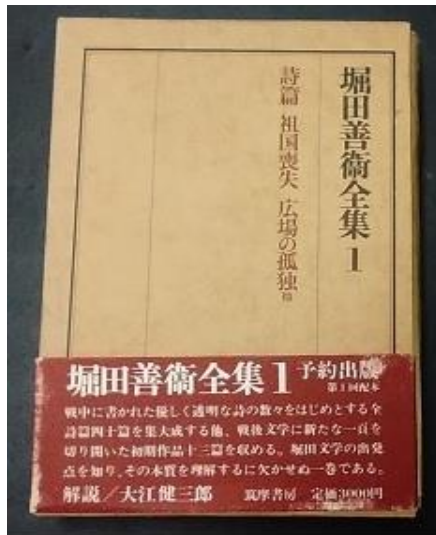

essais こころみ 2019年5月

(再掲) 2019年4月1日(月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集(筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年5月1日(水) 雨、「令和」初日

昨日4月30日を「平成の」大晦日というなら、今日5月1日は「令和」元年元日になるか。スマホの速報によると、即位の礼もおわり、初のお言葉もあったようで、いよいよ新しい時代が始まった。

カレンダーが一週間まるまる赤文字になることも初めてで、ずいぶん長い休みだが、街の風景はいつもの休日より少し人が多いぐらい。商業施設はどこも開いているし、わたしも普段できない仕事をやっている。

事務所へ来る電車の中で日経を読んでいたら、新元号考案者のインタビュー記事が載っていた。この記事は残しておこう。考案者この方の解釈、考えが、「令和」という言葉・元号に魂を与えているように感じる。

1日に新元号が発表された時、「白川静」の『常用字解』で「令」を調べたら、もとの字は「命」で、「よい」、「りっぱ」の意味があると書いてあった。それがのちに「うるわしい」となったのかもしれない。

ともあれ、新しい時代の始りに立ち合うことになった。若い頃、小説などを読んでいて、歴史のごくごく小さな一点に庶民の多様な営みがあるのだと感じた、その多様な営みの一員。

昭和から平成、平成から令和へと流れる歴史の真っ只中にいて、みてきただけの年令になったということ。

2019年5月3日（金）

東洋陶磁美術館『文房四宝』展



地下鉄の吊り広告を見た時から必ず行こうと思っていた特別展。「清閑なる時を求めて」というサブタイトルに惹かれた。10連休の後半、ここなら人はさほど多くないはず。でも念のため閉館1時間半前ぐらいに入った。いつもよりは少し多いけど、落ち着いた空気感はいつもどおり。

この連休は想定外の用が発生して、時間も神経もとられた。このあたりでゆったりした気分を味わいたいとここを選んだ。

そんな気持ちをよく汲んでくれるよう。展示は小ぶりながら、魅せた。筆、墨、硯、紙…。500年も昔の目の前の筆、どういふ人が使っていたのだろうとじっと眺めた。わたしもこういう筆で書いてみたい。先達たちの生活文化を想像してみる。

現在のような「瞬間的タッチ」ではなく、撫でるような手指腕の運び。感性や感覚に影響を与えないはずがない。同じ人間ではあるけど、人間的野性、感性は全く違う次元のものではないか。

そんなこんなことを考えながら、時空間を超えて、遊んだ。そういうことができるこの東洋陶磁美術館が近くにあった。大阪にあった、よかった。大阪のイメージ向上に寄与していると思う。

2019年5月6日（月）立夏

晴れ

連休後半はお天気に恵まれた。今日もよく晴れている。衣替えも済ませて、あとは夏を待つばかり。新緑のこの時期ばかりは街も見栄えする。今日は立夏。太田神社の杜若は今が見頃とか。

－ 堀田善衛全集を見なおす（4） － 逡巡する機会

この連休は急用で時間も精神もほとんどとられた。一段落して少しゆったりした時間を持つと、3日の午後中之島の東洋陶磁美術館へ行った。6月末まで『文房四宝～清閑なる時を求めて～』開催。

京都はもうゆったり散策できるどころではなくなり、最近「観光公害」まで言われるようになり、昨年秋にコリてからは、足が遠のいた。近場に東洋陶磁美術館があってよかった。

いつもより人は多かった。でも落ち着いた空気感はいつもどおり。ほっと一息つく。展示は小ぶりながら秀逸だった。筆、墨、硯、紙…。500年も前の筆、どういう人が手にしただろう…。目を近づけ、じっと眺めた。

2008年秋にあった『堀田善衛展』でたしか筆や原稿も展示されていた。この展示でだったか、この当時の出版社は、作家の原稿を最終的に製本して作家に返すと紹介していた。

へえー、そうなのか、すてきな慣わしだなあと感じたことをおぼえている。今は手書きの作家も少なくなっているだろうから、もうそういったことはないかもしれない。

『堀田善衛全集』第一巻の小説部の初めは「或る公爵の話」。巻末の解説によると、「堀田善衛」はこの作品を発表前に改作するつもりだったらしい。でもそうはせず、発表した。

「君側の奸」、「凡庸の悪」、ポピュリズムの愚を寓話的に語っているようにわたしは読みとったが、「堀田善衛」が逡巡した理由は少しわかるような気がした。

具体的にコレ！ということではなく、いくつかの小さな要素が重なったのことはないか。素直すぎる、真正面すぎる、それを昔話的な文体で書いて、一見稚拙な感じもしなくはない、でも書いた時点では是認。

書いて時点での自分をそのままに表せばいいと最終的には考えたのではないか。時間が経ってしまうと、自分自身また少し変わっているのだから。手書きだったことも逡巡の機会をつくったように思うが、さて。

2019年5月14日（火） 少し晴れ間

先週末から夏日が続き、今日は湿度が高い。5月のさらっとし

－ 堀田善衛全集を見なおす (5) － 感覚と構え

先週土曜にまた少し片づけをした。2008年以来定期的に過去のモノを整理している。2008年の時は大がかりにした。ノート類をばっさり廃棄した。残したのは十代の頃のものだけだった。

このとき自分なりに悟ったことが3つある。人間、根は変わらないものだ。過去を絶つ気になるというのは未来が開いたからだ。最終的に残るのは始まりと終わりだ。そう心におさめることができた。

それらのノートは箱にいれてしまっていた。表示はあえてしなかった。純といえば純、でも青すぎて、そっとしておきたい心理がはたらいた。その後すっかり忘れて、空箱だったかと開けて、“ああ、そうだった…”。

今回ちょっとギョツとしたのは、読書感想ノートがあったこと。前回もたぶん同じように感じたはずだが、人間の根というは、ある意味おそろしい。そうしていたことなど憶えていないのに、何十年後に同じようにしている。

読書感想ノートにはまだ「堀田善衛」はいない。20歳ををすぎた頃に出会った。小説を読んだ時期は10代から20代にかけて。今になってよかったと思うのは、この頃に自分の感覚のベースがそなわったということ。

最近出た本（『トップアスリートに伝授した勝利を呼び込む身体感覚の磨き方』小山田良治・小田伸午 創元社）の帯コピー「知識は、盗まれる 感覚は、盗まれない」を見たとき、そう、大事なものは感覚！

内容はほぼ忘れても、読みながら感じたこと、認識したことが心身のすみずみにしみ込んでいる。人間観、人生観、社会観、とりまとめてその人なりの世界観、その核心に感覚がおさまっている。

昨日、全集第一巻の短編「国なき人々」を読み直して、“ああ、これだったか…”。いまも妙に印象にのこっている場面がそこにあった。へんな表現だけど、どうあっても生きる人々の断片。今もどこかのある光景。

ふたたび「堀田善衛」を読みなおしているのは個人的な理由から。今もっと読まれていいのではないか。これからの世界を読み、自分の〈構え〉を探るうえで、よい助けになるはず。